

始



明治十七年三月 不發賣

愛知縣勸業雜誌

第六號

勸業課印行

東 周 館

目 録

- 陶器館開場式 本縣令演說 ○ 水産博覽會ノ結果 ○ 第二回製茶共進會 褒賞人名 ○ 農談會報告（前号ノ續） ○ 米國茶商トウマヌウオールス氏製茶ノ演說 ○ 發明糊摺器械 ○ 蕃薯ノ効用
- 虫害驅除（二件） ○ 遠國ヨリ木ヲ送ラレシ時ノ心得 ○ 貯金規則
- 要領并利息表 ○ 全國米位一覽表 ○ 名古屋區物價表 ○ 各郡區雇賃金表 ○ 試作 ○ 寒暖晴雨表

明治十六年十月十日東春日井郡瀬戸村陶器館開場式ニ付本縣令ノ演說

陶器館經營ノ功ヲ竣ヘ爰ニ開場ノ典ヲ舉グルニ方リ大ニ諸氏ニ告ル所アラントス抑陶器ノ濫觴ハ諸氏既ニ知ル所アリト雖モ末流ノ盛衰ヲ論スレハ先ツ其泉源ノ深淺ヲ揭

ケサルヲ得ス今ヲ距ル六百七十餘年前安貞年間加藤四郎
左工門春慶宋ニ入り製陶術ヲ學ヒ歸朝ノ後各地ニ於テ試
驗シ終ニ當村ニ來リ適意ノ粘土ヲ發見シ陶窯ヲ創設ス爾
來名工輩出シ天正年間ニ六作アリ文祿年間ニ十作アリ皆
品位佳絶コレヲ朝野紳士ノ賞玩スル所ナリ又當時日用ノ
器物ヲ製出シ世人ノ利用ニ供シ遂ニ陶器ヲ總稱シテ瀬戸
物ト云フニ至リシハ實ニ當村ノ榮譽ニシテ春慶氏ノ賜ト
謂可シ降テ享和年間ニ至リ南京燒ノ製法ヲ試ムルニ際シ
加藤民吉ナル者奮然志ヲ起シ肥前有田ニ赴キ千辛萬苦以
テ該地ノ製造術ヲ學ヒ歸村ノ後一種ノ製法ヲ發起シ新製
染付ト稱ス則チ現今ノ磁器ニシテ當時頗ル聲價ヲ發揚シ
製造高從前ニ陪從ス之レ明治六年澳洲博覽會以來漸次輸

出ノ數ヲ加ヘ米佛其他博覽會ニ於テ賞牌ヲ受ルノ名譽ヲ
得明治十一年ニ至リ大ニ輸出ノ數ヲ増シ一ヶ年ノ製造高三
十萬圓ニ登レリ諸氏ノ勉勵ニ係ルト雖モ亦加藤民吉ノ功
偉ナリトス然ルニ何者ノ姦工カ此時ニ際シ粗製濫造ノ器
物ヲ出シ徒ニ外面ノ美麗ヲ飾リ固有ノ純美ヲ損シ爲メニ
輸出ノ數ヲ減却シタルハ又諸氏カ自ラ招ク所ノ罪ト云ハ
サルヲ得ス有志諸氏既ニ意ヲ此點ニ注キ先ツ各自ノ製品
及傍ヲ摸範トナルヘキ物品ヲ陳列シ其沿革及精粗ヲ比較
シテ互ニ共進ノ念ヲ發サシメ漸次画學ヨリ製陶一切ノ學
術ヲ研究セシメ謀リ今回陶器館ヲ建築シ本日開場ノ典
ヲ舉ケ其陳列スル所ノ出品既ニ四百六十五點ニ及ブヲ視
ルニ將來必學術ト實業ト並行シ其長結果ヲ得ルハ信シテ

疑ハサル所ニシテ實ニ祝ス可キナリ然リト雖モ之ヲ既往ニ徵スレハ聊危疑ナキ能ハス客年設立シタル美術ノ如キ其功ヲ全フセス中途ニシテ生徒減少シ教師ヲシテ厭棄セシメ終ニ廢止スルニ至リシハ予カ當村ノ爲ニ深ク遺憾トスルモノナリ若從來ノ製造ヲ以テ最上ノ方法トナシ擬製ノ物品ヲ以テ精巧トナシ各自互ニ猜疑シ賄詐貪利ヲ以テ得策トスルトアレハ次第ニ世間ノ信用ヲ失シ職業ノ衰微ヲ招キ六百年來祖先ノ辛苦ニ出タル遺業モ地ニ墜テ終ニ自滅ノ苦境ニ陥ルモ亦圖ルヘカラス是レ諸氏ノ常ニ警戒ヲ加フヘキ所ナラスヤ凡學術ハ直接ニ利益ヲ與フルモノニアラソンテ幾分ノ學資ヲ費シ富源ヲ將來ニ開クモノナリ夫レ諸氏カ勉ムル所ノ目的ハ需用者ノ意向ニ適スル物

品ヲ製出シ我欲スル所ノ貨財ヲ得ルニ外ナラス而ノ近來仕向先ノ重ナルモノ皆歐米諸州ノ文明國ナレハ之ニ供給スル物品モ亦自ラ高尚ナラサルヘカラス又其他ト雖モ人智ノ進歩スル好尚モ亦從テ變換スルモノアルヘシ故ニ學術ヲ研究シ品質純良形容溫雅文飾精美ニシテ廉價ナル物品ヲ製スルハ工業派ノ急務ナラスヤ而ノ品質ノ純良ハ原料ノ精撰ニアリ原料ノ精撰ハ原質變化ノ律則ヲ究識スルニアリ原質變化ノ律則ヲ究識スルハ化學ニアリ形容ノ溫雅文飾ノ精美ハ美術ニアリ價值ノ廉ナルハ工費ヲ省クニアリ工費ヲ省クハ製造上ノ便利ヲ求ムルニアリ製造上ノ便利ヲ求ムルハ機械學ニアリ以上述フル所ノ三學科ハ工業上ニ於テ欠クヘカラサルト有志諸氏ノ既ニ知了スルモ

六
ノナレハ漸次歩チ此點ニ進メ今日豫期スル所ニ達セハ販
路次第ニ開通シ産額彌増加シ諸氏ノ富榮ハ豫想ノ外ニ出
ルトアラントス夫レ泉源ノ深遠ナル此ノ如クナレハ其末
流必盛大ナルヘキニ今反テ盛大ヲ闕ク所アルハ之ヲ壅塞
スルモノアレハナリ因テ今諸氏ニ向テ此壅塞ヲ除クニ三
學科ヲ以テスルノ方法ヲ縷陳スルモ此ノ如シ諸氏夫レ
喋々チ厭ハス深ク了得セントチ冀望ス

水産博覽會結果

凡力ヲ百般ニ及スモノハ其効別レテ少ナク力ヲ一方ニ專
ラニスルモノハ其効單ニシテ多シ曩ニ内國勸業博覽會及
繭生糸製茶綿糖等各共進會ノ設ケアル所以ニシテ共ニ是
裨益ヲ殖産上ニ與フルモノト雖事ノ總別ニ隨テ其効力自

七
ラ差違ナキ不能ナリ蓋シ今回水産博覽會ノ創設アルモノ
ハ政府于茲大ニ見ル所アリ抑本邦ハ周圍海ヲ環ラシ内ニ
巨湖大川ノ屈指スヘキアリ實ニ河海ノ物産ニ富ム言チ不
待ト雖其蕃殖漁獲ノ術未タ完備ナラス最概嘆スル所ナリ
夫レ國ノ富源ハ豈特リ陸産ニ止ランヤ水産モ亦能ク其事
業ヲ擴張シ其方法ヲ完全ナラシメハ又何ソ陸産ニ讓ラン
ヤ故ニ該會ハ明治十六年三月一日ヨリ同六月八日マテ一
百日間東京上野公園内ニ於テ開設ス出品ヲ四區ニ分チ漁
業製造養殖圖書等ヲ鑿品トス各省府縣ノ出品總數凡一萬
五千余點出品主ノ總員一萬〇五百五十七ニシテ之レカ褒
賞ヲ受クル者千百三十二人即チ總員ノ平均一割七厘ニ當
レリ各府縣ニ於テ受賞者差違アリ多キハ四割五分余少キ

ハ二分六厘其多少全ク地勢ノ然ラシムレ所ト雖亦實業者
平常ノ勉否ニ係ルモノナルヘシ本縣下出品總數四百六點
ニシテ人員百九十五名内受賞者二十一人ナリ此平均便チ
一割七厘ニ適合ス然レトモ一ノ優等賞ナキモノハ本縣ノ
漁場タル纔三河國渥美郡外海ニ濱スト雖餘ハ総テ内海ヲ
以テス或ハ偶有志者アルモ多クハ舊法ニ因襲シ新知開發
ノ力乏ク只目前ノ利ニ走リ若シ魚群ヲ見テハ時機ヲ不
問之ヲ捕獲スル等水産保護ノ何物タルヲ知ラス故ニ該業
ノ衰頽年一年ヨリ甚シ今ニシテ之レカ改良ヲ圖ラスンハ
又何時カ機會アラシヤ幸ニ水産博覽會ノ盛舉ヲ空フセス
縣下ノ漁業者舉テ相互ニ契約シ蕃殖漁獲ノ方法完然ナラ
シムルトキハ好結果ヲ得ル期シテ待ツヘキナリ茲ニ本縣

下受賞者人名并ニ薦告文ヲ記スル如左

水産統計表

愛知縣勸業課

類集表列共ニ宜キニ適シ管内水産ノ狀況ヲ徴スルニ足
ル用意ノ厚キ嘉賞スヘシ

名古屋區南辰巳町

養成鯉兒

新井 正名

多年ノ經驗ニ由テ養法ヲ自得シ其業漸ク緒ニ就クニ至
ル其功勞嘉賞スヘシ

名古屋區船入町

經節

清水太左衛門

製法品位共ニ佳良ニシテ需用ニ適ス而シテ販額亦甚カ
ラス其業ニ勉ムル嘉賞ス可シ

尾張國愛知郡田木ノ免町

島本權左工門

烏賊網雛形
魚鰈類六十七種

捕介器五種

網罟其他ノ器具各實用ニ適スルヲ證ス而シテ魚鰈ノ種類若干ヲ排列ス亦地方産種ノ梗概ヲ知ルニ足レリ計畫最モ宜シ其功勞頗ル嘉賞スヘシ

尾張國愛知郡下之一色村

漁業人總代

西川新七

文蛤鳥介

外十二名

収量太タ多シ而シテ品位亦佳良ナリ且從來協同シテ克ク漁撈ニ勉ム其勞嘉賞スヘシ

尾張國愛知郡羽埴町

漁業人惣代

高橋善右工門

魚類七種

外六名

各種共ニ捕獲頗ル多シ以テ協同克ク漁業ニ勉ムルノ厚キヲ觀ル其勞嘉賞スヘシ

尾張國海東郡蟹江本町村

服部治郎七

鰻

多年漁業ニ從事シ捕獲ノ多キハ克ク其業ニ勉ムルヲ觀ルニ足ル其勞嘉賞スヘシ

尾張國知多郡師崎村

篠崎勇助

釣具五種

數種ヲ展列シテ各其用法ヲ陳示ス或ハ未タ盡サ、ル所

アリト雖注意ノ功ナル嘉賞スヘシ

尾張國知多郡大田村

井上安右衛門

養成鯉魚及鰻

育養ノ法宜キヲ得テ産額ノ多キヲ致ス其業ニ勉ムルノ厚キ嘉賞スヘシ

尾張國知多郡豐濱村

石黒禮吉

若布

調製品質共ニ良シ而シテ収額ノ多キ販出ノ大ナル其勉勵ヲ觀ルニ足ル其勞嘉賞スヘシ

渥美郡水産集談會

水産集談會筆記

集談會ヲ開設シテ廣ク水産上ノ業務ヲ討究ス意ヲ公益ニ用フルノ厚キ嘉賞スヘシ

三河國渥美郡赤羽根村

出品人物代

鈴木七右衛門

縮緬雜喉

製法ノ宜キ風味ノ佳ナル是レ需用者多キ所以ナリ其勞嘉賞スヘシ

三河國渥美郡大草村

彦坂助左衛門

地引大綱圖

裝置善ク整フ近村此製ニ做フテ改良スル者多キハ果シテ實用ニ適スルヲ以テナリ其功勞嘉賞スヘシ

三河國渥美郡中山村

漁業人總代

三竹菊重

鮪搾粕

調製品位共ニ佳良ニシテ產出亦多シ其業ニ勉ムル嘉賞スヘシ

三河國寶飯郡大塚村

來本總衛

食鹽

品位精良他ニ其比類ヲ見ス唯產額ノ少キヲ憾ム將來勉メテ盛大ノ域ニ達センヲ望ム製法ノ注意嘉賞スヘシ

三河國寶飯郡形原村

三浦喜六

鰯搾粕

調製品位共ニ佳良ニシテ產額亦尠シトセス其勞嘉賞スヘシ

三河國幡豆郡小藪新田

鈴木久右衛門

養鱒

養法簡易頗ル其要ヲ得タリ且平素ノ勉勵ニ由リ收益ノ多キヲ致ス其功勞嘉賞スヘシ

三河國幡豆郡佐久島村

筒井藤吉

海鼠腸

製法宜シキニ適シ風味太美ナリ眞ニ地方名産ノ稱ニ負カス其勞嘉賞スヘシ

三河國幡豆郡西幡豆村

鈴木源左衛門

鰯搾粕

調製品位共ニ佳良ニシテ產額亦尠シトセス其勞嘉賞スヘシ

三河國幡豆郡宮崎村

小塚勘次郎

乾蟻

漁業ニ従事シ傍ラ遺利ヲ収拾シ世ノ需用ニ供ス而シテ
販額太タ大ナリ其勞嘉賞スヘシ

三河國碧海郡大濱村

外山勘兵衛

魚煎餅魚醃

二種共ニ製法宜キヲ得テ風味佳良ナリ頗ル需用ニ適ス
其勞嘉賞スヘシ

名古屋區鍋屋町

佐藤喜兵衛

水産博覽會へ出品スル各種ノ漁網皆精良ニシテ且廉價ナ
リ是レ平生商業ニ勉勵スルヲ徵スルニ足ル依テ褒置候事

知多郡常滑村

平野忠司

同村近海ニ生産スル各種ノ魚類ヲ蒐集シ漁業者ニ代リ水
産博覽會へ出陳ス是レ平生意ヲ殖産ニ用フルノ厚キヲ見
ルニ足ル依テ褒置候事

知多郡常滑村

安井市三郎

同文

葉栗郡北方村

後藤佐兵衛

水産博覽會へ出品スル笹籠製法精良ナリ平生注意ノ厚キ
ヲ見ルニ足ル依テ褒置候事

海中郡津島村

山田庄次郎

水産博覽會へ出品スル所ノ魚籠兩ナカラ産額多量ナリ其業ニ勉ムルヲ見ルニ足ル依テ褒置候事

西加茂郡築平村

鈴木彦平

水産博覽會へ出品スル鮎釣具製造ノ注意周到ナリ平生其業ニ勉ムルヲ見ルニ足ル依テ褒置候事

碧海郡大濱村

角谷徳三郎

水産博覽會へ出品スル蝸蚌捕獲器具ハ便ニシテ且利ナリ平生意ヲ漁具改良ノ點ニ用ユルヲ見ルニ足ル依テ褒置候事

渥美郡伊良湖村

小久保惣三郎

水産博覽會へ出品スル鱸漁ノ圖克ク其實況ヲ摸寫ス人ヲシテ一日其漁法ヲ知ラシム平生其業ニ勉ムルヲ見ルニ足ル依テ褒置候事

渥美郡越戸村

柳原悦次郎

水産博覽會へ出品スル牡蠣ハ一村ノ協議ニヨリ克ク捕獲ノ製限ヲ確定ス平生其業ニ勉ムルノ厚キヲ見ルニ足ル依テ褒置候事

幡豆郡一色村

稻垣七郎平

水産博覽會へ出品ノ蝦ハ産額多量ナリ平生其業ニ勉ムルノ厚キヲ徵スルニ足ル依テ褒置候事

碧海郡高田村

水野善十郎

同郡河川ニ生産スル各種ノ魚類ヲ蒐集シ参考品トシテ水産博覽會へ出陳ス是レ平生意ヲ殖産ニ用ユルノ厚キヲ見ルニ足ル依テ褒置候事

第二回神戸製茶共進會褒賞人名如左

名古屋區傳馬町

横井半三郎

南設樂郡新城村

三等賞

銀盃壹個
金五圓

四等賞

銀盃壹個

海西郡立田村

丸山久太郎

六等賞

木盃壹個

加藤太兵衛

北設樂郡古真立村

惣代

白川俊一郎

六等賞

木盃壹個

名古屋區鍋屋町

七等賞

木盃壹個

菊池有英

丹羽郡河北村

七等賞

木盃壹個

仙田七左衛門

丹羽郡北小淵村

七等賞

木盃壹個

真野藤助

南設樂郡海老村

七等賞 木盃壹個

原田 彦九郎

寶飯郡伊奈村

七等賞 木盃壹個

市川 源次

北設樂郡稻橋村

功勞賞 金拾圓

古橋 暉兒

志ヲ永遠ニ存シ以テ國産ノ増殖ヲ圖リ遂ニ製茶ヲシテ
地方ノ一產物タラシムルニ至ル其功勞尠カラズ因テ之
ヲ褒賞ス

麥之部

北設樂郡

小田木村青木治郎吉
本郷村堀岡彦五郎

〔農談會報告前号ノ續〕
春ノ彼岸ニ馬糞及ヒ性

分強キ肥料ヲ用ユルヨリ「ソブ」病ヲ生スルコトアリ

同郡大野瀬村小木曾一家 「ソブ」ノ付タル麥ヨリ採タル種

子ヲ用ユルヨリ「ソブ」病ニ罹ルコト多シ

同郡小田木村青木治郎吉 田麥ノ種子ヲ畑地ニ用ヒ畑麥

ノ種子ヲ田作ニ用ユル様絶ヘス交換スレハ「ソブ」病ノ患

ナシ

同郡設樂村西田利十 鹽ヲ混和セル元肥ニ麥種ヲ混淆シ

テ時付ルトキハ「ソブ」ノ患ナシ但シ鹽ノ分量ハ麥種ニ升

ニ鹽五合ヲ適度トス

同郡田峯村増田繁吉 小麥ノ「ソブ」ヲ防クニハ時付ノ際鹽

ノ「ニカリ」ヲ肥料ニ混和シ之ヲ施ストキハ其効アリ又至

極肥料ニモナルナリ

西加茂郡押澤村澤田嘉六 麥ノ「ソブ」ヲ防カント欲セハ肥類ヲ早ク施ストキハ其害ナシ

東加茂郡仁王村太田眞三郎 前年大豆ヲ作リタル處へ翌年大麥ヲ蒔ケハ根虫ノ害アリ之ヲ豫防スルコハ人糞一荷ノ中へ糞ヲ一合ツ、入レテ根肥ニスレハ根虫ノ害ナキコト數年實驗スル所ナリ

東加茂郡黒坂村佐宗淺次郎 小麥ニ癖ト稱シテ出穂ノ時節虱ノ如クナル虫數多穂ニ登リ麥ノ莖ヲ黃色ニ變セシムルノ害ヲ生スルトキ是ヲ驅除スルコハ兩三日毎朝露ノ乾カサル前木灰ヲ振り掛クレハ該虫ヲ絶ツコト茲ニ三ヶ年經驗セシコト頗ル其功ヲ奏セリ

愛知郡鳴海村阪野作左工門 麥畑ニ地鼠ノ生シタルコハ

人糞ニ硫黄ヲ和シ施用スルヲ長トス

同郡則武村木村儀左工門 地鼠麥畑ニ生シ麥ヲ穴へ引入ル、コトアレトキハ其穴へ菟糞ノ水ニ石灰ヲ和シ灌クヲ可トス

同郡鳴海村阪野儀平 麥蒔付タル后鳥類來リテ穿ツコトアリ故コ下種ノ際縮粕ニ硫黄ヲ混和シ施用スレハ其害ナシ

渥美郡小湊津村中村文六 麥ノ根虫ハ初秋ノ頃ヨリ土中ニ棲ミ植物ノ根ヲ喰ヒ寒中ハ地底ニ潛伏シテ春ニ至リ漸ク暖氣ヲ催スノ候ニ至リ地中淺キ所へ上リ麥ノ根ヲ喰ヒ大暑舊曆六月中ノ頃ヨリ化生シテ一種ノ甲虫トナリ其色眞黒ニシテ能ク空中ニ飛ヒ方言「ブ」ト云ヒ又「コン」カ

ラ或ハ^{コカ}大豆ノ葉花及葡萄柿等ノ葉ヲ喰フ大害虫ナ
 子虫ト唱フ大豆ノ葉花及葡萄柿等ノ葉ヲ喰フ大害虫ナ
 リ此虫ハ化生スルヤ直チコ尾コ數卵ヲ頭凡二三粒孕
 ミ大豆ノ根本ニ放卵シ日ヲ經テ孚化シ又根虫トナル其
 變化スル証ヲ舉ンコ第一麥畑ニ該虫ノ生スルヤ必ス畦
 間ニ多ク生ス畦間ハ即チ前年大豆ノ畦ナリ第二前年ノ
 甘薯畑ニハ該虫生スルコト至テ少シ因テ此害ヲ防カン
 ニハ宜シク^{ブン々々}チ驅殺スルコアリ明年夏ノ末ヨリ
 最寄ノ場ニ夜々火ヲ燒キ該虫ヲ燒殺セ或ハ小サキ桶等
 ニ石灰水石礮水等ヲ容レ置キ此中ニ拂ヒ落シテ採ルヘシ
 渥美郡古田村 永井彌兵衛 根虫ハ多ク大豆ノ根ニ生ス去ル
 午年ニハ根虫多ク生レ麥作頗ル損毛セリ其明年ヨリ畦
 ナ年々交換シ今年大豆ヲ蒔キ畦ハ來年粟ヲ蒔ク様ニ

畦ヲ切り變ヘテ蒔ケハ根虫生スルコト少シ

同郡越戸村 伊藤長四郎 麥ノ根蟲ハ秋ノ頃ヨリ土中ニ潜
 伏セ春暖催スチ埃チ出テ患害ヲナスモノナリ此豫防法
 ハ甚困難ナリト雖ヒ種子ヲ種油ニテ浙シ播種スルヲ豫
 防ノ良法トス但チ種子壹升ニ種油壹勺位混合スヘシ
 八名郡下吉田村 田中郡治 麥ノ虫害ヲ豫防スルニハ濕地
 ナレハ麥種壹斗ニ盞四合ノ割ニ溶カセタル水ニ種子ヲ
 浸ス事少時ニシテ搥ヒ出シ粉糠ニ揉合セテ播種セ乾燥
 ノ地ナレハ種子ヲ油ニテ濕シ粉糠又ハ焚灰ヲ揉合セ播
 種スレハ著キ効驗アルモノナリ但毎日蒔キ得ヘキ程ツ
 、種子拵ヲナスヘシ

西加茂郡北大野村山内重太郎 大豆ニ火虫ノ發生シタル
 トキハ麻稈ノ炬ニテ驅除スルヲ良トス
 同郡荻萱村岩野關次郎 大豆ノ火虫ヲ豫防スルニハ其虫
 ナ捕殺シ申ニサレ其畑傍ニ晒シ置ケハ其姿ヲ見テ退散
 スルモノナリ
 東加茂郡赤原村黒柳芳五郎 黍ノ虫害ヲ防クニハ人糞ノ
 薄肥凡四荷位ニ石炭油ヲ三合程交セ根肥ニ用ヒテ試ル
 コト茲ニ三年虫害ヲ蒙ラサルナリ
 同郡市平村安藤清八 粟作ノ虫^ム方^ヨ言^ヨ害ヲ防クニハ穂ノ
 マ、取り置キ日數二十日位寒水ニ浸レテ後干シ上ケ種
 トスルトキハ害ナシ又生立チ宜シキコト數年ノ經驗ナ

リ尤モ播種ハ厚キ方ヨロシ
 同郡霧山村落合房五郎 大豆虫害ヲ防クニハ朝露ノ乾カ
 サル前木灰ニ煙草ノ粉ヲ交合テ散布シ置キ少シク乾キ
 タル頃振落セハ虫死シテ其害ヲ去ルコト妙ナリ
 額田郡岡崎大垣津音藏 粟ヲ蒔付ルニハ其前日小器ニ種
 油ヲ盛り中へ種子ヲ浸シ置キ翌朝之レニ硫黃ヲ混和シ
 播種スルトキハ虫害アルコトナシ
 愛知郡鳴海村阪野義平 粟黍ノ虫ニハ煙草ノ粉ヲ肥料ニ
 交セ施用スルカ又硫黃ヲ混和シ施スヲ良トス
 同郡一社村柴田宗七郎 粟蒔付ノ際種子ニ油ヲ塗リ硫黃
 ナ混和シテ施ストキハ虫害ナシ
 同郡藤枝村鈴木伊八 粟黍ノ虫害ヲ防クニハ魚内糞^{カマゴ}ノ汁

ヲ撒布スルヲ可トス

渥美郡神戸村尾藤佐右工門 大角豆或ハ小豆ニ「コ」ノ虫
ノ付キタルトキハ馬ノ瓜屑ヲ細ニシテ撒布スヘシ然シ
此瓜ノ藪ナクシテ撒布スルコ足ラサルトキハ少シツ、
竹ニ挿ミ凡四坪ニ一ヶ所位立テ置ケハ其臭氣ヲ嫌ヒ悉
ク散去スルモノナリ

幡豆那鶴ヶ池村安藤廣七 大豆ニ日虫ノ付タルニハ風上
ニ於テ藪ヲ燒キ其烟大豆畑ニ覆フトキハ該虫逃ケ去ル
コト妙ナリ又皮虫ノ生シタルニハ朝大豆ノ葉ニ露アル
内灰ヲ撒布スレハ乍チ皮虫絶ヘルナリ
八名郡細川村中島新助 稗ハサシ虫ノ爲ニ枯ル、コト多
キモノナレトモ水糞一荷ニツキ煤二升程入レ之ヲ一尺

二三寸ツ、隔テ畦ニ澆キ其所へ薄ク株時ニスレハ生立
宜シク又虫害モナシ

同郡大野村鈴木彌兵工 稗ハ麥作ノ中ニ時クテ常トスレ
トモ生立遅ク虫害モ亦多シ因テ數年來試驗スルニ八十
八夜頃苗床ニ時付發生後浴水ヲ度々澆キ置キ麥蒔入後
畦ヲヒキ水肥ヲ施シ苗ノ根ヲ能ク洗ヒ一尺二寸隔位ニ
五六本ツ、植レハ無病ニテ生育極メテ良トス

北設樂郡田村山村彦十郎 稗出穂ノ際虫害ニテ出穂セサ
ルコトアリ之ヲ防クニハ肥水肥ナ一荷ニ煤二升程ヲ混
和シ種子ヲ蒔ク時之ヲ施セハ此患ナシ

左ノ一篇ハ在横濱米國一番館主茶商トウマスウオ

ルス氏カ三重縣下津松坂四日市滋賀縣下土山村等
 於テ地方製茶家ノ爲メ演述シタル譯文ナリ氏ハ多年
 ノ經歷ニ富ミ加之日本ニ居留スルノ久シキヲ以テ斯
 篇ノ如キ深ク本邦製茶ノ實況ヲ穿鑿シ其改良ノ順序
 方法等ヲ論シタルモノコシテ當業者ニ裨益アルヤ樹
 カラサルヲ信シ茲ニ之ヲ錄示ス切ニ望ムラクハ管下
 製茶家諸子ニ於テ徒ニ一場ノ說話トセス且讀ミ且味
 ヒ以テ製茶改良ヲ企畫スルノ資ト爲ンコトヲ
 余カ數年ノ間經驗スル所ヲ以テ之ヲ視ルニ今日茶商業ノ
 上ニ多少ノ改良ヲ加フルハ洵ニ緊急ノ事ナルヲ信セリ若
 シ今ニシテ而シテ之ヲ改良セスンハ製造人賣買人共ニ大
 損害ヲ被ムリ亦救回スヘカラサルノ機運ニ迫レリト云フ

ヘシ

回顧シテ十年前製茶ノ景況ヲ觀ルニ當時横濱ニテ米國へ
 輸出セシ茶ノ平均價格ハ一磅ニ付洋銀三十仙餘ナリ(即日
 本百斤ニ付洋銀四拾枚)而シテ米國紐育ニ於テ賣捌ノ平均
 代價ハ一磅米金四拾仙餘ナリキ又當時日本ヨリ毎年輸出
 セル總額ハ一千二百萬斤ニシテ其代價ハ五百萬弗餘ナリ
 キ退テ今日製茶ノ景況ヲ視ルニ日本及ヒ米國紐育ニ於テ
 ノ平均代價ハ前記價格ノ半額ニ只僅ニ超過スルノミナリ
 然ルニ今日ノ輸出高ハ完ク之ニ反シ十年前ニ比スレハ殆
 ト二倍ノ増額ニ達シ其得ル所ノ代價總額ハ乃チ漸クニシ
 テ十年前ニ得タル所ト同額ナリトス若是其生産高ノ増加
 アルニモ拘ラス其獲ル所ノ代價ハ依然トシテ増加セサル

コトヲ明知セハ今日茶業ノ衰頽シテ製造人商估共ニ損失
アルハ當サニ然ルヘキコトニシテ敢テ驚クニ足ラサルナ
リ是ニ據テ之ヲ觀ルトキハ今日速カニ之ヲ改良セスンハ
終ニハ資産名望アル者ハ製造人商估ヲ問ハス皆此業ニ從
事スルコトヲ嫌忌シ茶業ノ結果如何ニ苦慮スルナキ無産
無力者ノ手ニ墜チ樞要ノ商業モ萎靡トシテ振ハサルニ至
ラン斯ノ如ク資産名望アル商估ハ皆此ノ業ヲ放棄シテ顧
ミル莫クンハコノ貴重ナル商業モ一層困難ヲ生シ奸商輩
ノ爲メニ茶ノ性質ハ益租恐ニセラレ聲價地ニ墜ルニ至ル
ハ必然ノ勢ナリ豈ニ慨歎ノ至ナラスヤ
今日此改良ヲ望ムハ獨リ日本有志者ノミニアラズ外國人
ト雖モ亦志アル者ハ日本人ト同様ノ關係利益ヲ有スルヲ

以テ同シク改良ヲ希望スルナリ余モ亦爲ニ感ラ抱ケリ故
ニ今日幸ニシテ諸君ノ懇請アルニ由リ茲ニ來テ愚案ヲ開
陳シ以テ諸君ノ參考ニ供セントス然レトモ余ハ決シテ製
茶上秀逸ナル智識ヲ存スル者ニハアラサルナリ唯余ハ多
年ノ間米國及支那日本ニ於テ此業ニ從事セシヲ以テ此間
ニ實歴經驗スル所ヲ諸君ニ呈レ併セテ今日茶業ノ慘況ヲ
挽回シ數年ノ間余カ貴國ニ駐在シ得タル懇親ノ情ニ答ヘ
貴國ノ隆昌ヲ冀圖スルニアルノミ
却說改良ヲ謀ルニ當リテハ先ツ其弊害ノ由テ來リシ所ノ
原因ヲ講究セサル可ラス是レ猶疾病ヲ治スルニ當リテハ
其之ヲ發生セシ原因ヲ知ラサレハ容易ニ治術ヲ施スコト
能ハサルカ如シ

今ヲ距ルコト十年前ニ在テハ茶業尙ホ未繁盛ノ時ナリシ
 今ヤ則チ然ラス此業利益ナシ何故ニコノ十年間ニ於テ斯
 ノ如キ大變動ヲ生セシツ左ニ其事由チ陳說セシ
 第一 諸君カ製スル所ノ茶ノ品位ハ甚々下レリ是レ諸君
 カ其製量ノ多カランコトノミチ欲シ適宜ノ制限ヲ立テ義
 良ノ茶葉ヲ摘採セス外國人カ買取ラン限リハ如何ナル茶
 葉ト雖モ皆之ヲ摘採セリ故ニ茶樹漸々衰弱シテ良品ヲ生
 セサルニ至レリ然レトモ製出額ハ前年ヨリ大ニ増加セリ
 第二 唯製出高ノ増加ヲ以テ主要ト爲スカ故前年ノ如キ
 良品ヲ製スルノ注意ヲ怠リタリ
 第三 下等品ノ製出高多キヲ以テ日本居留外國商ハ其購
 買品ノ粗惡ヲ隱蔽スル念慮ヲ起シ天然ノ茶形色澤ヲ完ク

變換スルニ至リシヲ以テ消費者ハ其欺カルハ所トナレリ
 假令其詐偽製タルコトハ稍ヤ之ヲ知ルニ至リシト雖モ之
 カ爲メ自然ニ茶價ヲ失墜シタリ米國人カ茶ヲ使用スル風
 習ヨリシテ觀察スルトキハ今日トテモ其消費高ハ人口ニ
 比較シテ前年ト大差ナシ然レトモ其品位ハ甚シキ差異ア
 ルヲ以テ充分ナル代價ヲ拂ハス
 第四 品位ノ不良ナルニモ拘ハラス市場ニ搬出スル斤量
 過多ナルヲ以テ米國ニ於テ此商業ニ從事スル商賈ハ頻リ
 ニ競賣シテ價格ヲ低落セシメタリ
 製茶ハ長ク保有スルトキハ損傷スルモノナリ故ニ一期ヨ
 リ他期ニ移ルマテ之ヲ蓄フルコトハ人皆好マサルナリ況
 ソヤ一時ニ周歲ノ需用ニ餘ル斤量ヲ輸送スルニ於テオヤ

是故ニ商賈ハ皆其貯藏品ヲ賣急ニ競テ之ヲ賣拂フヲ以テ
 終ニ非常ノ低落ヲ來セリ
 第五 右ノ如キ事情ハ皆日本市場ニマテ影響スルヲ以テ
 日本ノ商業ハ益艱難ニ愈不利ヲ生セリ
 如斯弊害ヲ惹起シタル責ハ只一方ノミニアラズ製造者商
 賈共ニ眼前ノ小利ニ眩惑シ將來ノ結果如何ヲ慮ラサルニ
 由ルト雖モ而モコノ弊ヲ釀セシ根源ハ製造者ニ在リトス
 故ニ之カ改良ヲ謀ルモ亦宜シク其根源ヨリ始ムヘシ
 業已ニ農務局ヨリハ茶芽ノ摘採精製箱詰等ニ注意スヘキ
 コトヲ論達セラレタリ故ニ當業者ハ銘々之ヲ勉ムルハ至
 當ノ事ト云フヘシ
 然ト雖余カ經驗スル所ヲ以テ之ヲ視ルニ各人銘々ニ勉勵

努力シテ之ヲ改良セントスルモ永久持續スルハ稀ナルヲ
 以テ能ク其最初ノ目的ヲ達スルハ殆ト難事タリ各人銘々
 ニ分執スル業ハ困難ニシテ恐苦ノ念ヲ抱クヲ以テ却テ廉
 價ニ之ヲ製スルコトヲ得ス況ヤコノ正業ニ反スル者アリ
 テ嘗テ辛苦セス又損失スルコトモナク僥倖ノ利益ヲ占メ
 テ前者ノ業ヲ妨害スルニ於テオヤ故ニ斯ノ如キナ事業ヲ
 成シ得ルハ獨リ資産ヲ有シテ勢力ヲ保ツ者ノミ是等ノ者
 ト雖モ猶他ニ尽力贊成スル者ナキトキハ終ニ失敗ヲ取ル
 モノナリ今日ノ形勢ヲ以テ之ヲ察スルニ各自ニ努メテ之
 カ改良ヲ謀ルモ横濱神戸ニ居留スル外國商賈ヲシテ充分
 ノ信用ヲ得セシムルハ太々難カルヘシ而シテ其信用ヲ得
 サルニ於テハ各自カ改良ヲ要ムルノ苦辛モ或ハ水泡ニ属

セシ何トナレハ茶ノ商賣ハ固ト此二港ニ於テスルト雖之
ヲ購賣スル外國商輩ハ一モ製造人ノ姓名ヲ知ル者ナク又
問屋仲買人ニ於テモ其製造人ノ姓名ヲ指示スルコトナク
利サヘ其品ノ產地及精粗ヲ區別セス相混合シテ奇利ヲ射
ラシコトヲ謀リ製造者ト外國商トヲ籠絡シテ益其間ヲ離
隔セントスルノ傾向アレハナリ故ニ製造人ハ良品ヲ製ス
ルモ從來ノ景況ニテハ其姓名ヲ外國商ノ間ニ顯スコト能
ハサリキ
是故ニ全ク改良ノ功ヲ奏セントスルニハ前陳ノ諸難事ヲ
排擯スルノミナラス尙百般ノ困難事ヲ斥クルノ方法ヲ講
究セサルヘカラス
然リト雖僅々數人ノ協力ト區々ノ方法ヲ以テ改良ヲ謀ル

ハ危險ト困難ヲ履ムノミニシテ奏功甚ク難シトス之ニ反
シ多數ノ人員結合セテ規律ヲ設ケ共同以テ之ヲ謀ラハ其
目的ヲ達スル容易ナリ譬ハ爰ニ大膽ナル兵士アリ一人ニ
テ戰場ニ臨ミ功名手柄ヲナセントスルトキハ其生命ヲ亡
フアルモ其目的ヲ達シ得サルヘシ若シ精銳ナル大隊ヲ以
テ此ニ臨マハ或ハ勝利アルヘキナリ
右ノ理由ナルニヨリ余ハコノ改良ヲシテ成功セシムルニ
ハ共同團結ノ力ニ據ラサル可ラスト信ス巳ニ當地方ニ於
テハ製茶有志ノ諸君組合會社ヲ設ケ改良ノ目的ヲ達セン
トスルノ舉アリト聞ク欣喜ノ至リニ堪ヘス若シ當縣内重
立タル製茶人舉テ共同組合セハ其功ヲ奏スルコト難カラ
サラン而シテ其功ヲ奏スルトキハ他府縣ニ於テモコノ善

例ニ倣ハンコト必セリ
 然リ而シテ假令共同團結スルモ其目的確乎タラス又方法
 善良ナラスンハ成功固トヨリ難トス故ニ其成功ヲ欲セ
 ハ第一ニ目的ヲ明瞭堅固ニシ規約ヲ定メ善良ノ取扱法ヲ
 設ケ相當ノ資本ヲ下タシ事ニ爰ニ從フヘシ然ラサレハ折
 角ノ團結モ直チニ瓦解シ舊ニ復スルナラン
 今日諸君ハ團結スルノ目的ハ實ニ重要ナリコノ業ハ數百
 千ノ者カ從事スル業タルコモ關ヒス方法ノ不善ナルト怠
 惰ト不注意トニ由リ衰退ニ至リシヲ挽回シテ繁榮タラシ
 メントスルニ在レハ誠ニ美事ナリト云ヘシ
 該業ノ取扱向ハ多少ノ改良ヲ要スルコト明ナリ既ニ是迄
 多少ノ方法ヲ設テ改良ヲ謀リシコトアルモ皆其効ナクシ

テ失敗セリ故ニ其爲シ來リタル方法ヲ以テ再ヒ改良ヲ謀
 ルハ徒ラコ失敗ノ繰返ヲ要ムルノミ今日諸君カ改良ヲ謀
 ル目的ハ唯其製出額ヲ増加スルニ非ス稍ヤ高尙ナル目的
 タレハ之ヲ行フノ方法モ亦高尙ナラサルヘカラス
 諸君中ニハ此改良ニ就キテ余カ意見ヲ質問セラレタル人
 アルヲ以テ淺見ヲ左ニ陳述セン
 余カ見ル所ハ諸君カ業己ニ計畫セル所ヨリ或ハ事重大ナ
 ルヘシ重大ノ方法ヲ以テセサレハ將來繁盛ノ基ヲ固フス
 ルヲ得ス
 諸君モ知ラル、如ク報國忠愛ノ心ヲ以テ此業ノ成功ヲ得
 ントセハ是非トモ茶芽ノ摘採ヲ制限シテ善良ナル部分ノ
 ミ取り之ヲ精撰シテ諸君自ラ製茶産地ノ中央ニ製造場ヲ

建テ現ニ横濱神戸等ノ外國商館ニ於テナス所ノ緊要部分
 ハ皆此製造場ニテ爲スヘシ之ヲ約言スレハ製茶ヲ精撰シ
 テ箱詰ニナシ更ニ再製ヲ要セスシテ海外ニ直輸スルコト
 ナ爲シ得ルマテ仕上クルナリ
 右ノ仕方ハ茶ヲ製出スル諸外國ニ於テハ皆現ニ爲ス所ノ
 事タリ故ニ日本於テモ假令目下各般ノ改良ヲ圖ル前ナリ
 ト雖之ヲ實行シ能ハサル理由ナキナリ
 余ハ諸君カ右ノ一事ヲ全ク實行スルコトアラサレハ諸君カ
 冀圖スル改良ハ決テ成就セサルコト、信セリ今日外國商
 カ日本茶ヲ購求シテ海外ニ販賣スル各般ノ手續ハ諸君ニ
 於テモ同シク爲シ得ヘキノ業ナリ諸君自ラ之ヲ爲ストキ
 ハ却テ冗費ヲ省テ廉價ニ製シ上クルコトヲ得ヘシ外國人

カ必要トナス所ハ諸君カ是迄半精製ニテ置キタルモノヲ
 上精製ニナシ大洋ヲ輸送スルニ適セシメ又貯藏ニ堪ニル
 爲メ輕便ナル箱ニ詰ル等ノ事ニテ別段秘密アルニ非ラス
 實ニ簡易ノ事業ニシテ當地方ニ於テモ容易ニ行ヒ得ル事
 ナリ

開港場ニ於テハ地價ヲ始メトシテ人夫薪炭等ニ至ル迄皆
 高價ナレハ此業ヲ行フニ當リ莫大ノ入費アリ然ルニ當地
 方ニ在テハ右諸般ノ開港場ニ比セハ大ニ低廉ナルヘシ况
 ヤ其消費スル金員ハ諸君ノ近地ニ散シテ其地方ヲ富スノ
 資トナルニ於テヤ
 前陳ノ如クスルトキハ第一ニ製茶固有ノ價格ヲ増スヘシ
 則チ諸君カ今日マテ開港場迄運搬スル間ニ多少品位ヲ損

スルノ弊ヲ防止ス又現ニ開港場ニ於テ專ラ行ハル、精粗
 混合ノ惡計ヲ免レ諸君カ好ム所ノ如ク精良ノ品ヲ製造シ
 得ヘシ然ラハ則チ其利益クル明白ニシテ無量廣大ナリ
 然レトモ斯ノ如キ利益ヲ得ルニ至ルハ正實ニ勉勵シ不撓
 ノ團結力ヲ以テスルコアラサレハ決テ之カ成功ヲ見ル可
 ラス是敢テ諸君ニ忠告スル所ナリ諸君カ此事業ヲ實行ス
 ルニ當テハ余程大ナル中央製造場ヲ設ケ之ニ準シタル資
 本ヲ要ス又最モ能ク整備セル組織ヲ以テ執行シ且ツ智能
 アル者ヲ撰拔シテ之ヲ董理セシメ非常ノ注意ヲ加ヘサル
 ヘカラス
 諸君カ共同團結シテ前陳ノ緊要事業ヲ成就セントスルノ
 精神ヲ有スルナラハ賢明ナル日本政府ニ於テモ其事業ヲ

保護スルヤ疑ヒナレ併政府ニ於テハ果シテ諸君カ此事
 業ヲ成レ得ルヤ否ヤ又諸君ノ精神ハ正直確實ナルヤヲ証
 明センコトヲ要ムルヤ必セリ
 右事業組織上尙ホ開陳スヘキ條項居多ナリト雖何レモ六
 ケ布コトニアラサレハ茲ニハ之ヲ詳細ニ説明スルコ及ハ
 サルヘシ然レトモ諸君中余カ助力ヲ望ム者アラハ他日之
 チ開説スルノ勞ヲ辭セサルヘシ右事業ヲ執行スルニ當テ
 ハ豫メ諸君ニ忠告シテ置クヘキコトアリ則チ爰ニ余カ諸
 君ニ呈セル事件ハ横濱内外商人ノ抵抗ヲ惹起スルノ一事
 ナリ是レ則チ諸君カ此業ノ成否ハ彼等ノ損益ニ關スルヲ
 以テナリ
 横濱仲買商ハ其取引ノ客先キナリ又外國商ハ廣大ナル製

茶場ヲ有スルヲ以テ皆諸君ニ攻撃ヲ試ミルノ勁敵ナリ諸君カ此ノ勁敵ニ打勝ハ耐忍力及抵抗力并ニ不撓不拔ナル團結力ヲ併セ持ニアリ然レトモ尙ホ恐クハ此戰爭ニ於テ多少ノ損害ヲ受ケルノ用意アラサレハ全勝ヲ得カタカラ

諸君ニ於テ右等ノ用意準備セハ終ニハ全勝ヲ得ルヤ疑ヒナシ何トナレハ諸君カ行フ所ノ業ハ正理正道ニ原ツクモノナレハナリ余ハ諸君ニ望ム諸君ハ此等ノ抵抗ニ遭遇スルモ失望シテ其目的ヲ變スルコトナカラシムコトヲ是等ノ抵抗ハ諸君カ赤心ヨリ團結決心シテ事ヲ行フ勢力ニ勝ノ理由ナキモノナリ

若又是等ノ困難ニ遭遇スルモ諸君尙ホ支那印度ニ於テ行

ハル、正實ナル商業モ日本ニ起サント欲セハ諸君カ製出スル茶ハ暫ク米國へ直輸シ自ラ之ヲ賣捌クコトヲ爲サ、ル可ラサルニ至ランモ亦計リ知ル可ラス直輸ハ難事ニ非ラス又敢テ恐ルヘキ事ニ非ス政府ニ於テモ亦當サニ獎勵スヘキノ事ナリ又之カ資本ヲ得ルヤ容易ニシテ外國商中ニモ其事ヲ賛成シテ諸君ヲ幫助スル者居多ナラント信ス

右ノ事業方法其宜シキヲ得ハ目下ノ有様ニテ依然商業ニ從事スルヨリハ却テ利益アルニ至ルモ亦知ル可ラス

米國人民ハ是マテヨリモ善良ノ茶ヲ要スルナリ又米國政府ニ於テハ既ニ製造茶ノ輸入ヲ禁止セリ故ニ日本ヨリ輸送スル善良ノ茶ハ米國ニ於テ善良ノ代價ヲ得ルハ蓋シ容易ナリ米國人民ハ貧窮ナルモノニアラス善良ノ品ニ向テ

ハ即チ善良ノ代價ヲ拂ヒ得ル也而シテ之ヲ賣リ弘ムルニ
要用ナルハ諸君カ送ル所ノ茶ハ善製ナリ正當ノモノナリ
且ツ正實ニ製造シ正實ニ包裝シタルモノナリト云フコト
ヲ米國人民ニ証明シ且ツ知ラシムルニアリ
目下米國市場ノ茶相場ハ下直ナリコノ相場ヲ下直ナラシ
メタルハ米國市場ニ下等品ノミ充滿シテ各商共ニ競争シ
テ賣急クカ爲メナリ故ニ諸君ハ力メテ善良品ヲ製出シ米
國消費者ニ其善良ナルコトヲ知ラシムヘシ斯ノ如クスル
時ハ早晚其効ヲ顯シ至當ノ價格ニ回復スルヲ得ヘシ
都テ事業ノ成功ヲ速ニ見ント欲セハ前陳ノ方法ニ依ラサ
ル可ラス充分ノ實力ヲ有セサル一人一個ノ勉強ヲ以テ容
易ニ成就ス可ラス今日ハ最大改良ヲ施スヘキ好時機ト云

フヘシ何トナレハ今日ハ製茶ノ價格下落ノ極度ニ達シ茶
ハ勞力ヲ要スル製産物中最モ低廉ナルモノナリ諸般ノ事
情ハ皆是緊要的ノ商業ヲシテ從前ヨリ一層安全堅固ナル
地位ニ置カシメ正實ナル改良ヲ望ムノ時期ナレハナリ今
余カ縷述セル所幸ニシテ諸君カ改良ノ舉ヲ益シ諸君ノ社
會ニ安全堅固ナル商業ヲ起スノ基礎トナリ諸君ノ國家ヲ
隆榮ナラシムル一助トナルアラハ幸甚之ニ過マス

備考

本文ノ如ク結合團結スルニ就テ直輸販賣ノ利益ヲ
示スコト左ノ如シ

第一 地方ニ於テ製造ヲ精製ニシテ箱詰マテ爲ストキハ
品位ノ善良ナルコトヲ保証シ得ルヲ以テ何レノ市場ニ於

テモ善良ナル代價ヲ得ラルヘシ

第二 従前使用スル尋常茶櫃ハ不用ニ属スルヲ以テ之カ代價ヲ省クヘシ目下横濱等ニ於テ右ノ茶櫃ハ通例皆ナ放棄スルヲ以テ其代價ノ過半ヲ失フモノナリ

第三 製茶ヲ精密ナル箱ニ入ル、トキハ運搬ノ費用ヲ省クヘシ

第四 目下ノ取扱方ニテハ製茶人ハ茶ノ水氣粉末等ニ運搬ノ費用ヲ拂フヲ以テ是等ヲモ省クコトヲ得ヘシ

第五 當地方ニ於テ精製箱詰等ヲ爲ストキハ人夫箱代紙代等ハ開港場ヨリ廉價ナルヲ以テ毎百斤ニ付銀貨一弗餘ノ益アルヘシ

第六 横濱仲買人等ノ口錢ヲ省クヘシ

第七 仲買費込等ニ於テ使用スル見本茶ヲ省クヘシ

第八 事業大ナルトキハ運搬諸入費ヨリ賣買口錢藏敷金利保険料等ニ至ルマテ大ニ減省スルヲ得ヘシ

右ハ精製直輸スルニ當リテ費用ヲ減スルノ大要ナリ而シテ余カ見ル所ヲ以テ前記第七八兩條ヲ除キテモ猶其益スル所毎百斤ニ付銀貨二弗餘即チ金三圓位ナルヘシ而シテ當地方ニ於テ製造シテ費用ヲ増スモノハ鉛箱位ノミ直輸賣賣ヲ爲スニ於テハ其販賣ヲ取扱フ外國商ノ口錢手數料及雜費等ヲ増加スルト雖モ此諸入費ハ目今トテモ外國商ハ皆其本國ノ注文主ヨリ得ル所ナリ而シテ其注文主ナル本國ノ茶商人ハ販賣代價中ニ之ヲ含加シテ消費者ヨリ取戻スナリ故ニ此會社ニテモ亦同様ニテ只外見ニ顯ハル、ノミナ

レハ真ノ臨時入費ト云フ者ニアラサルナリ前記ノ理由ナ
レハ米國へ直輸シテ販賣スルトキハ同國市場ニ於テハ他
ノ品ヨリ凡一割ノ高價ヲ得ルナラン

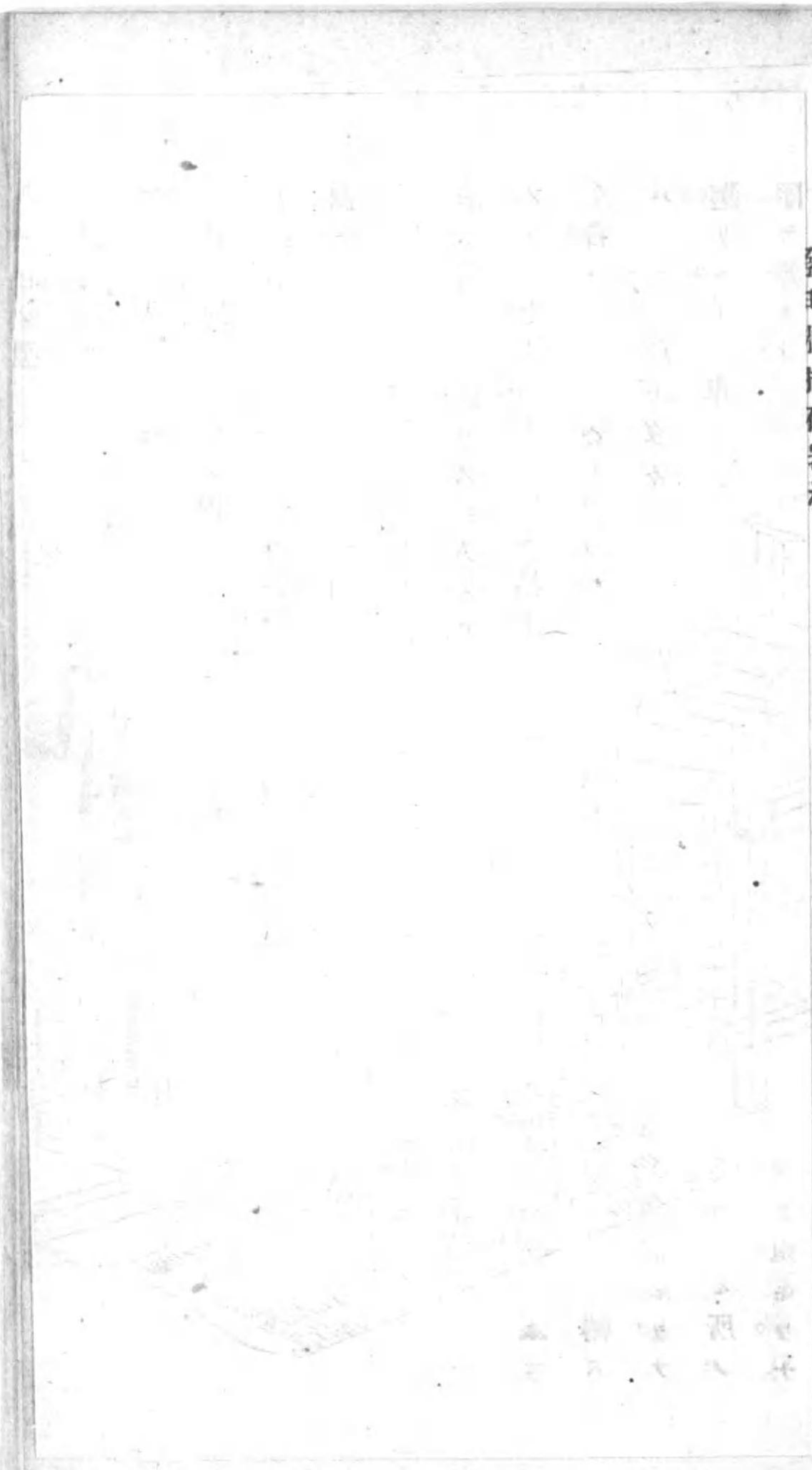
但百斤ノ平均價格ヲ三拾圓ト見積ルナリ

故ニ毎年輸出スル製茶三百萬斤アルトキハ此益金凡拾萬
圓アルヘシ其他賣路ヲ擴張スルニ付臨機ノ勉勵ヲナシ米
國人民ヲシテ當地組合會社ノ正實ナルト製茶箱詰ノ完全
ナルコトヲ知ラシメハ代價ニ一割ノ増加ヲ見ルハ容易ナ
リ然レハ則チ此増加ハ完ク會社ノ利益ヲ増加セルナリ

〔岐阜縣勸業月報抜摘〕

發明例摺碓器械

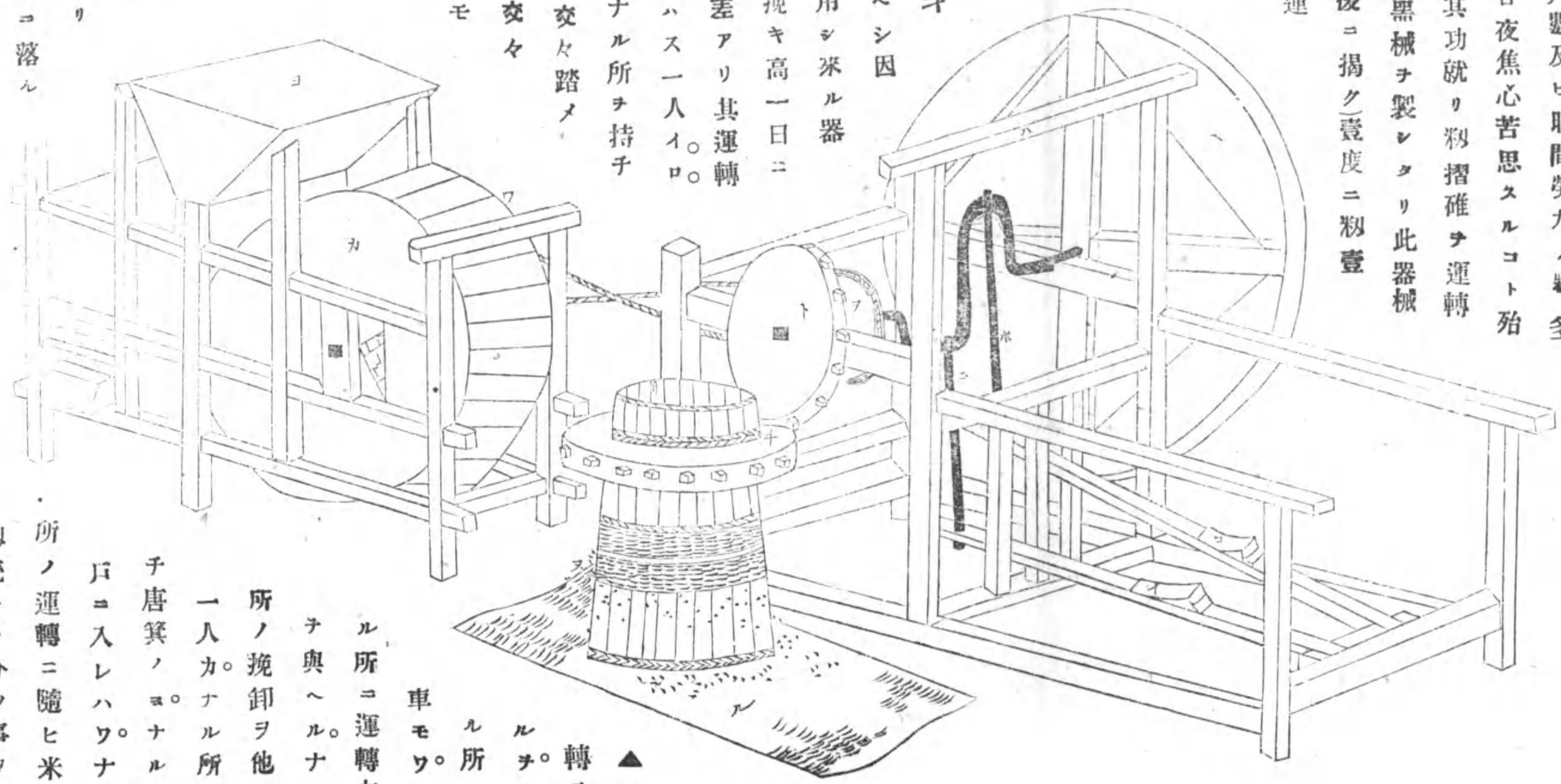
〔額田郡役所報〕



發明粉摺確器械

〔額田郡役所報〕

此圖ハ粉摺確ヲ運轉スル器械ナリ抑從來農家ニテ使用來リシ粉摺確ハ強壯ナル者四人コテ七時間ノ勞力ヲ以テ凡ソ四石ノ粉ヲ挽クニ留マル而シテ其人數及ヒ時間勞力ノ多ナルヲ憂慮シ日夜焦心苦思スルコト殆ト半ケ年遂ニ其功就リ粉摺確ヲ運轉スヘキ一種ノ黑械ヲ製シタリ此器械ハ運轉ノ法ハ後ニ掲ク壹度ニ粉壹斗七升ヲ入レ運轉スレハ僅ニ十分時間ニシテ挽終ルヲ得故ニ一人一日ノ勞力八時間トセハ粉八石壹斗六升ヲ挽キ得ヘシ因テ從來ヨリ使用シ來ル器械ト比セハ粉挽キ高一日ニテ四石有余ノ差アリ其運轉法ハ男女ヲ問ハス一人イロノ所へ上リハナル所ヲ持チ左肩ノ足ニテ交々踏メハニホノ所モ交々廻リヘトノ車モ隨テ廻リトヨリ子ニ運轉力ヲ與ヘリニ入リタル粉子ナル所ノ運轉ニ隨ヒニナル所ヨリ出テナル所ニ落ルナリ此時ヘトト共▲



並價八圓五十錢上等拾圓位ナリ

但確及唐箕ヲ除クノ價額ナリ

▲ニ
 轉スル所ノ車モヲナ
 ル所ニ運轉力ヲ與ヘルナル所ノ挽卸ヲ他ノ一人カナル所乃唐箕ノモナル上戸ニ入レハワナル所ノ運轉ニ隨ヒ米ト粉売トヲ分ツ事ヲ得

額田郡六ツ名村
 指物職 木村 行政

蕃薯ノ効用

本邦ニ於テ蕃薯ヲ種ルハ薩摩ヲ以テ嚆矢トナルハ世人ノ
 夙ニ知ル所ナリ關東ニ於テハ之按スルニ蕃薯ハ本來呂宋
 及福州ニ産シ后琉球ニ傳フ故ニ又琉球芋ト云フ薩摩ニテ
 多ク唐芋ト云フ寶永年間薩摩國揖宿郡山川郷ノ利右衛門
 ナルモノ琉球ニ航シ其種ヲ得テ還ル是ヨリ遂ニ四方ニ蕃
 殖シ農民常食ノ一トナルニ至レリ去年大隅ノ属島ヲ巡回
 シ其實況ヲ見ルニ家々多クハ蕃薯ヲ以テ常食トナシ偶米
 飯ヲ食マシムルモ却テ歎ハサルノ色アリ蓋是口腹ニ慣レ
 サルニ因ルナラン而ルニ蕃薯ノ用ハ獨リ食料トナルノミ
 ナラス又以テ燒酎、酢、醬油、類ヲ製スヘシ
 一蕃薯ヲ以燒酎ヲ蒸溜スル方法ハ極メテ容易ナリ例ヘハ

蕃薯目方一貫目ヲ蒸シ之ヲ春キ暫ク冷シテ温氣去ルノ后
 桶ニ移シ米糲ナレハ三四合麥粕糲_{（時々）}穀ト爲セシモノ
 ナレハ五六合ト水一升トヲ以テ能ク混和シ寒中ハ凡三十
 日四五月ノ候ナレハ十二三日ノ間時々之ヲ混和スルキハ
 自然ニ釀熟ス是ニ於テ蒸溜シテ燒酎一升ヲ得ルヲ適當ト
 ス此トヲ「ス」度量二十度位ノ「アルコール」ヲ含有ス且其蒸
 溜セシ粕ハ數十日間桶ノ類ニ貯ヘ置キ_{（時々）}氣アル廢物
 好_シ之ヲ腐敗セシムレハ肥料トナスベシ農家ニ於テハ專ラ
 此肥料ヲ得ルヲ目的ト爲スモノ多シ
 一蕃薯ヲ以テ酢ヲ製スルハ蕃薯ヲ小片トナレ之ヲ日ニ乾
 シ此小片壹升ニ麥糲五合ヲ混和シ之ニ水壹升ヲ加ヘ半蒸
 ニ爲シ之ヲ冷シテ壺ニ入レ手ヲ以テ能ク混滑シタル後紙

ニテ目張シ雨ノ當ラサル日陰ニ置キ其上ニ銅錢一個ヲ載
 セ置其錢ニ綠青ヲ帶ル時ヲ成熟ノ度トナス若シ幾日ヲ經
 ルトモ綠青ヲ帶サレハ酢ノ成ラサル証ナリ蓋混滑法ノ備
 ラサルニ因ルナラン此時ニ當テハ更ニ蕃薯二三個ヲ燒キ
 壺中ニ投セハ忽釀熟スヘシ或ハ敷酢トテ最初壺中ニ純良
 ナル酢ヲ少シク散布シ後右ニ陳ル如ク爲セハ必良酢ヲ得
 ルナリ此酢タル其色恰モ清水ノ如クシテ毫モ臭氣ナク其
 味最佳ニシテ酢氣甚タ烈シ元來此製作ハ薩摩國岡兒ヶ水
 村農岡村甚左衛門ノ祖父甚作ノ妻ト乙ナルモノ發明ニ係
 ルト云其近村以前ハ專ラ麥ヲ以テ製スル習慣ナリシモ此
 發明アリシヨリ全ク麥酢ヲ止メタリ
 一醬油ノ製法ハ蕃薯ヲ方二三分許リニ切り一日程日光ニ

晒シ充分水氣ノ去キ之ヲ鍋ニテ熬リ少シク焦色ヲ帶タル
キ之ヲ取り揚ケ小麥又ハ大麥ヲ加ヘ麴ニ製ス而シテ水搗
ノ加減等ハ大豆製ニ異ルナシ但シ麥ヲ加フルキニ其熬
揚ケタル番薯ニ水ヲ注キ少シク蒸氣ヲ含マシメテ混和ス
就中寒製ノ如キハ大豆製ニモ劣ルヲナシト雖モ只滓渣多
シト云ヘリ

一味噌ノ製法タルヤ元來番薯ヲ大豆ニ代用スルノミニテ
他ニ異ルヲナケレモ搗ハ少シク多量ニ加フルヲ好シトス
又一時ニ數樽ノ量ヲ製スルキハ酸味ヲ帶フルノ憂アリ宜
シク旬餘ノ食料ニ充ツルノ量ヲ製スヘシ
一番薯以テ葛粉ニ代用スル製法ハ先ツ槌ヲ以テ番薯ヲ碎
クカ又ハ金卸(俗ニ山葵卸ト云)ニテ細末ニ爲シ水ニ浸シ置

キ其ノ含ム所ノ白汁全ク除去セシ粕ハ絞リ揚ケ水底ニ殘
ル白汁ハ濕氣ヲ去ルタメ屢々清水ヲ注キ晒シ上クレハ直
ニ葛粉ニ代用スヘキモノトナル

一極寒ノ候番薯ヲ小片トナシ凡十日程之ヲ浸スノ日數愈
々多ケレハ愈々濕氣ヲ去リ白色ヲ表ス水ニ漬ケ然後引揚
テ日光ニ乾シ細末ト爲ス片ハ糯米ヲ以テ製シタル寒晒ニ
類ス且虫害ナクシテ永ク保存スルニ便ナリ

一飴ノ製法ハ番薯ヲ蒸シ之ヲ舂キ瓶桶ニテモ可ナリニ移
シ麥芽(俗ニモヤシト云フ)ヲ加ヘ凡壹貫目ニ四勺許リヲ混
入ス暫時蓋ヲ覆ヒ置キ后三四回混動スルキハ恰モ水ヲ添
ヘタルモノ、如ク變化ス此時袋ニ入レ絞リ其垂レ汁ヲ鍋
ニテ煉リ詰メ成ルヘク長ク火ニ掛ルヲ好トス

此外番薯ヲ以菓子ヲ製シ(粉米ノ品ニ小豆砂糖ヲ和シ煉羊
羹ト爲スノ類)料理ニ仕用スル等其功用枚擧ニ遑アラスト
雖モ此ニ畧ス

烟草害虫驅除

〔大日本農會報告抜〕

予か烟草を栽培するに毎歳一種青色の裸虫を生し之が
爲めに蝕害を被ること少なからず偶老農某の説ニ據り小
麥稈灰少許を其の梢上に撒せしに三日ニ至り又此法を未だ蝕害を被らさ
るものニ施すに最も豫防の功あるを覺ひたり

蛭虫の驅除

蛭虫の稻田に在るものを驅除するには水口に海鼠二三個
を置へきなり尙其功をして著しからしめんには肥料に食
鹽を用也へしといふ宜く之を試みて其當否を判すべし

遠國ヨリ木ヲ送ラレシ時ノ心得

〔農業雜誌〕

遠國より樹を取寄せし時は往々其樹根乾涸甚しきに至り
てい全く枯れ凋ミし如く見ることあり斯る時は先づ泥土
中に樹根を浸し後數日間はと濕ふたる地中に埋め置くへ
し然るときは根皮より漸次に水分を吸収して全く其の勢
力を恢復するに至るへ至然れとも尋常人の多く爲す如く
水中に漬け置きて其の加勢を望むは甚た宜しからず却て
樹を腐らすの恐れあり注意すへき事なるへ至

貯金規則の要領并利息表

人誰か老後に至りても壯年の時の如く強健なりと思ふも
のあらんや又誰か世に疾病盗火の難なく又時として疾病
んやいやしくも老後の衰弱ハ免れかたく無事の日におい
盗火の難も追れがたきことを知らば壯年無事の日におい
て其豫備をなさざるべからず然るに世間往々此理りに開
く唯今日あるを知りて明日あるを知らず從て得れば從て
散し毫も永遠のはかりおとをなさず適節儉貯蓄を爲さん
とするものあるも或は寄托其所を得ずして狡猾者の手に
落ち其貯蓄と水泡に歸せしめ又或は些少の金を積立るを
煩ばしとなし所謂塵積りて山を爲すといふ理りを思はず

遂に金銭は貯蓄し得べからざるをもつて常談となすに至
る、こゝらの人々若くは疾病其他の災害に遭ひ又は老衰廢職
の時來れば俄に凍餒困厄に陥り、竟に他人の累を爲す實に
歎はしき事ならずや故に富裕の者は姑く舍き其他の人々
常に心懸けなるべく日々費用をはぶき應分のたくはへ
をなして確實なる所へ預け置き將來の慮をなす事肝要な
と、試に思へ、今いかなる人にても心懸け次第にて一日に壹
錢若くは貳錢を贏して一月に五拾錢乃至六拾錢と貯蓄
するの敢て難きにあらざるべし假りに其人をして毎月五
拾錢を預けさせ、これに六ヶ月毎に年七分貳厘の利息を加
へ、三十年を経る時は、元金六百貳拾壹圓拾六錢五厘となる若し更
錢五厘に去て合金六百貳拾壹圓拾六錢五厘となる若し更

に五年を加へ、三十五年に及ぶ時ハ、元金貳百拾圓利金七百拾圓五拾七錢八厘にして合金九百貳拾圓五拾七錢八厘となるなり、積少の金銭にてもこれを積み置く時は斯る巨額の資金と得べし、節儉の餘徳實に大ならずや、又人たるもの男と舉れば之に家産と授け、女を舉れば之に良姻を求めざるものあらんや、其兒を舉るの時より毎月壹圓を預り滿二十年に達する時は、元金貳百四拾圓利金貳百八拾六圓八拾四錢八厘にして合金五百貳拾六圓八拾四錢八厘となるべし、下等社會より此貯金ある時と、祖は一家の産業を營むに足る、又嫁娶の儀も稍整ふべし、別に心思を勞せず、危険を踏まずして、此幸福を享るにわらずや、當局貯金預の法は僅少の金高にてモ安全に積立置き、これに利息を加へて漸次に

巨多の金額に至らまめんとするにあせ、既に此法を開設してより、早く其實益あるを悟りて貯金を爲すもの數萬人に及びたりといへども、いまだ前に述べたる將來の慮を爲さねばならぬといふ理りと、此貯金法の實益あるを知らざる人も多ければ、今主として夫らの人々にこれを知らしめんがため、貯金規則の要領、並利息の計算表を左に掲ぐ

明治十六年九月

驛 遞 局

規則要領

一 驛遞局貯金は何人にてモ一人に付一度に十錢以上又一日に五拾圓迄と預るへ之

但 端數は厘位迄に限るへし

一 貯金の拂戻しを願ふ人は貯金預所に至り其旨申出べし
 一 貯金の利子は一ヶ年に付元金の百分の七分二厘の割合に
 来て諭へは金拾圓を預くれバ一ヶ年に七拾貳錢六ヶ
 月に三拾六錢一ヶ月に六錢の利子を得へし
 但拾錢に満たざる端數にハ利子を附せず
 一 貯金預け人は始めて預け金をなしたる日より滿六ヶ月
 目毎に貯金通帳を驛遞局へ差出し原簿に突合せ利子の
 記入を受くべし
 一 利息の毎半年六月十二月に區切り計算し元金へ組込むべ
 一 一度に五拾圓以上の金高を預け度ものは其都度驛遞局
 の認可を得て預け金をなすべし

一 貯金預け人改名改印する歟又は住所を轉したる時は驛
 遞局へ届書を差出すへ
 但此書面へは所持の通帳の記號番號并通帳を渡せ
 一 預所地名を記載すべし
 一 貯金の儀に付驛遞局並に貯金預所へ差出す書面は郵便
 税を免除すべし
 一 貯金は驛遞局貯金預所の標札を掲けたる家よて取扱ふ
 べし
 利息表
 金拾錢を日々に預くる時は一ヶ月の預け高凡る三圓に
 て一ヶ年間絶へそ預くれは元金三拾六圓となまで壹圓拾
 九錢五厘の利息を生ず左の第一表の如し

貯金の利子は六月十二月と二回に計算して元金に加ふるが故に更にまた利子を生えたる年を経るに随ひ増殖の割合多くなりて左の第二第三表に掲ぐる金高となる其第二表は一回限りの預け金を敷年間据置これに生ずる利息を示し第三表と毎月若干の預け金を爲し元金の蓄積と利息の増殖とを示す

第一表 一月ヨリ十二月迄預ケ金元利計算表

月次	預ケ金	利息	月次	預ケ金	利息
一月	三圓	〇	越	高	十八圓 二十七錢
二月	三圓	壹錢八厘	七月	三圓	貳毛
三月	三圓	三錢六厘	八月	三圓	十貳錢七厘 貳毛
四月	三圓	五錢四厘	九月	三圓	十四錢五厘 貳毛
五月	三圓	七錢二厘	十月	三圓	十六錢三厘 貳毛
六月	三圓	九錢	十一月	三圓	十八錢壹厘 貳毛
	計十八圓	二十七錢	十二月	三圓	十九錢九厘 貳毛
	元利合計十八圓貳十七錢			計三十六圓 貳十七錢	九十貳錢 五厘貳毛
				元利合計三十七圓十九錢五厘	

第二表 一度預ケシ金額數年間所置タル元利合計表

年數	預高			
	一度拾圓	一度三拾圓	一度五拾圓	一度百圓
十五年目	金拾四圓 拾四錢壹厘	金四拾貳圓 四十五錢九厘	金七十圓七十 八錢五厘	金百四十壹圓 五十九錢貳厘
十年目	金貳十圓 十壹錢七厘	金六十圓 四十五錢二厘	金百圓 七十九錢八厘	金貳百壹圓 六十四錢
十五年目	金貳十八圓 六十貳錢七厘	金八十六圓 八錢四厘	金百四十三圓 五十四錢壹厘	金貳百八十七圓 十六錢八厘
二十年目	金四十圓 七十五錢貳厘	金百貳十貳圓 五十八錢八厘	金貳百四圓 四十貳錢八厘	金四百八圓 九十九錢六厘
二十五年目	金五十八圓 貳錢五厘	金百七十四圓 五十七錢九厘	金二百九十壹圓 十四錢四厘	金五百八十二圓 五十錢二厘
三十年目	金八十二圓 六十二錢七厘	金二百四十八圓 六十三錢壹厘	金四百十四圓 六十五錢三厘	金八百二十九圓 六十二錢四厘
三十五年目	金百十七圓 六十六錢四厘	金三百五十四圓 十錢	金五百九十圓 五十六錢四厘	金千八百八十壹圓 五十九錢九厘

第三表 數年間每月預ケ金元利合計表

年數	預高		
	每月拾錢宛	每月五拾錢宛	每月壹圓宛
十五年目	元金六圓 利金壹圓十五錢九厘 合金七圓十五錢九厘	元金三十圓 利金五圓 合金三十五圓 八十六錢四厘	元金六十圓 利金十壹圓 合金七十壹圓 七十五錢四厘
十年目	元金十二圓 利金五圓三十六錢 合金十七圓三十六錢	元金六十圓 利金二十六圓 合金八十六圓 九十四錢二厘	元金百二十圓 利金五十三圓 合金百七十三圓 九十五錢六厘
十五年目	元金十八圓 利金十三圓 合金三十一圓 八十七錢四厘	元金九十圓 利金六十九圓 合金百五十九圓 七十錢六厘	元金百八十圓 利金百三十九圓 合金三百十九圓 五十二錢壹厘

等 中		等 上		位
安尾伊三阿近	房張勢河波江	信淡周攝武美肥	後濃藏津防路濃	
常加遠若伯山河長	陸賀江狹普城內門	播	豐	中
飛上丹甲伊駿讚	磨	前	前	位
驛野波斐豫河岐	因	大	筑	下
	幡	和	前	位
格外		下		
渡	但越丹備備筑紀出安伊志和伊下美下			上
島	馬中後後中前後伊雲藝豆摩泉賀野作總			位
琉	陸陸岩磐羽石越能越佐土			中
球	奧前代城前見後登前渡佐			位
	肥陸羽對壹薩大日相上豐隱			下
	前中後馬岐摩隅向摸總後岐			位

日本全國米位一覽表 (明治十五年米麥外三品共進會報告)

七十三

三十五年目	三十年目	廿五年目	二十年目
元金四十二圓 利金百四十壹圓 合金百八十三圓 七十錢一厘	元金三拾六圓 利金八十七圓 合金百貳十三圓 九十五錢八厘	元金三十圓 利金五十二圓九厘 合金八十二圓九厘	元金貳拾四圓 利金二拾八圓 合金五拾貳圓 五拾五錢五厘
元金二百十圓 利金七百十圓 合金九百二十圓 五十七錢八厘	元金百八十圓 利金四百四十壹圓 合金六百貳十壹圓 十六錢五厘	元金百五拾圓 利金二百六十圓 合金四百十圓 九十四錢二厘	元金百二十圓 利金百四十三圓 合金二百六十三圓 三十四錢壹厘
元金四百二十拾圓 利金千四百二拾一圓 合金千八百四十壹圓 七拾三錢	元金三百六十圓 利金八百八十二圓 合金千二百四十二圓 七十錢五厘	元金三百圓 利金五百二十二圓 合金八百二拾二圓 拾三錢六厘	元金二百四十圓 利金二百八十六圓 合金五百二十六圓 八十四錢八厘
元金千貳百六拾圓 利金四千二百六拾 合金五千五百二十 六圓拾六錢四厘	元金千八十圓 利金二千六百四十 合金三千七百二十 八圓七十八錢五厘	元金九百圓 利金千五百六拾六圓 合金二千四百六十 六圓八十三錢四厘	元金七百二十圓 利金八百六十圓 合金千五百八拾圓 八十一錢三厘

七十二

明治十六年自一月至六月愛知縣名古屋區物價表

品名	量目	一月	二月	三月	四月	五月	六月	平均
米	壹石	五八八二	六二三四	六三二九	六一三五	六一七三	六七五七	六二二七
小麥	壹石	三〇七四	三七〇四	三八一七	三七〇四	三四八四	三四九六	三五四七
綠綿	百斤	二三八八〇	二五三九七	二六六六七	二六三三〇	二六〇一六	二六一六	二五七〇
茶	百斤	二八八〇〇	三三六〇〇	三五二〇〇	二八八〇〇	三三〇〇〇	二七二〇〇	三〇九三三
油	壹石	二七七七七	二七〇二七	三〇三三三	二七七七七	二四三九〇	二三八一〇	二六八四七
清酒	壹石	二二〇〇〇	一二五〇〇	一四五〇〇	一二五〇〇	一一五〇〇	一一二〇〇	一二三三三
大豆	壹石	五五五五	五五五六	六一七三	六一三五	五九七六	六一三五	五九二二
砂糖	百斤	一〇六七〇	一〇六六〇	一一四三〇	一〇六六〇	一〇六七〇	一一三三〇	一一〇六七
煙草	百斤	一一〇〇〇	一一〇〇〇	一一〇〇〇	一二五〇〇	一二五〇〇	一二五〇〇	一二七五〇

品名	量目	一月	二月	三月	四月	五月	六月	平均
椎茸	百斤	八〇五〇	八〇五〇〇	八〇五〇〇	七三九八〇	七三三八〇	七三九八〇	七六六四〇
材木	拾板六分壹坪	一四一五〇	一二〇〇〇	一五〇〇〇	一五〇〇〇	一五〇〇〇	一二二五〇	一四〇〇〇
炭	拾貫目	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇
薪	拾貫目	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	一六七	一九五
雞卵	千個	一一八〇〇	一〇八五〇	一〇〇〇〇	九七五〇	九〇〇〇	九二五〇	一〇一〇八
麻	壹貫目	一三八〇	一三八〇	一三八〇	一三八〇	一三八〇	一三八〇	一三八〇
生絲	百斤	五六八〇〇〇	五三〇〇〇〇	五六〇〇〇〇	五三三〇〇〇	五三〇〇〇〇	五二〇〇〇〇	五四〇一六七
醬油	壹石	一一〇四八	一一七六五	一一七六五	一一七六五	一一七六五	一一二一一	一一七〇三
蠶絲	壹貫目	二二五〇	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇	一一三三三	二二二一一
錫	百斤	二二〇〇〇	二四〇〇〇	二二〇〇〇	一六〇〇〇	一七六〇〇	二〇八〇〇	一九九〇〇
昆布	百斤	八〇〇〇	八四八〇	八四八〇	八六四〇	八六四〇	八六四〇	八四八〇

洋砂糖	縮緬吳呂	生金巾	洋綿糸	硫黃	鉛	石	鐵	銅	干	糖
百斤	壹碼	七斤	三番ノ 二番ノ 十	百斤	百斤	花崗石 壹切	拾貫目	百斤	拾貫目	壹石
六一五〇	二〇〇	二五〇〇	一三〇〇〇	三二〇〇	八九〇〇	六二〇	四一〇〇	二九〇〇〇	二〇八三	一五二四
六一五〇	二二三	二七〇〇	一三八〇〇	三二五〇	八七〇	五八〇	四一〇〇	二九〇〇〇	二〇〇〇	一三八四
六一五〇	二〇八	二七〇〇	一三六〇〇	三二〇〇	八八〇〇	五七〇	四〇〇〇	三二〇〇〇	二〇八〇	一三三三
五九二〇	二〇〇	二五〇〇	一三〇〇〇	三二〇〇	八七〇〇	五九〇	三八〇〇	三二〇〇〇	二一七〇	一二五〇
一六六七〇	二〇五	二七五〇	一三三〇〇	三二五〇	八七〇〇	五二〇	三二〇〇	三〇〇〇〇	二二七〇	一三六八
六五五〇	二一〇	二七九〇	一三三〇〇	三二八五〇	八二〇〇	五七〇	三二〇〇	三二五〇〇	二四四〇	一四五三
六二六五	二〇六	二六五〇	一三二五〇	三二〇五	八六六七	五七〇	三二七三	三〇〇八三	二二七四	一三八七

七十六

石炭油	洋鐵
拾壹箱	十貫目
三二五〇	二九〇〇
三二五〇	二九〇〇
三三〇〇	二九〇〇
二八〇〇	二九〇〇
二六〇〇	二七〇〇
二四〇〇	二五〇〇
二九三三	二八〇〇

例言 表中一斤ハ渾テ百六十目ニシテ諸物品ハ毎月中旬中等品ヲ以テ建相場トセシモノナリ

愛知縣各郡區雇賃調

郡區名	水産業雇夫一日賃錢	農業雇夫一日賃錢	大工一日賃錢
十五年	十六年	十五年	十六年
名古屋區	四一四	二四三	二九七
愛知郡	三六七	二一六	二九四
東春日井郡	無	三五〇	四〇〇
	無	三〇〇	三七〇

七十七

北設樂郡	東加茂郡	西加茂郡	額田郡	幡豆郡	碧海郡	知多郡	海西郡	海東郡	中島郡	丹羽郡	西春日井郡
無	二八三	二〇〇	無	二七〇	二〇〇	二五〇	四〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	無
無	二五三	一五〇	無	二〇〇	一五〇	二三〇	三五〇	二五〇	二五〇	二五〇	無
三〇〇	二三三	二〇〇	二八〇	二五〇	二〇〇	二五〇	二五〇	二六〇	二六〇	二五〇	三一〇
二五〇	一七八	一五〇	二二〇	二〇〇	一七〇	一六〇	二〇〇	二二〇	二二〇	二二〇	三一〇
三五〇	三三一	三〇〇	四〇〇	四〇〇	三〇〇	三〇〇	三五〇	三五〇	三五〇	三五〇	三五〇
三〇〇	二五一	二五〇	三四〇	三六〇	二五〇	二五〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三二〇

明治十五年植物園洋種小麥試作表

南設樂郡	寶飯郡	渥美郡	八名郡	名	稱	反	別	収	量	・	反	獲
無	二五〇	二三〇	無	最上小麥	三〇六	三〇六	三六〇	一一二	二五			
無	二〇〇	一九〇	無	ツノヲ小麥	二二六	四六八	一六三	二	三二			
二五〇	二〇〇	二三〇	二五〇	グラフ小麥	三二一	七九八	二一九	六	六			
二〇〇	一八〇	一八〇	一八〇	矮生小麥	五二九	九五八	一六〇	六	六			
二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	平均	三二七	六四六	一六五	六	六			

明治十六年前半年分勸業課植物園寒暖風位及晴雨表

月次	晴		雨		風		位		寒		暖		
	晴	晴	雨	雨	乾	乾	巽	坎	艮	坤	最高	最下	
一月	二五	二五	四	二	二九	〇	〇	〇	〇	〇	五三	三四	四四
二月	一九	一九	四	五	一五	六	〇	〇	〇	六	五四	四〇	四七
三月	二〇	二〇	八	三	二二	五	〇	〇	〇	〇	六〇	四四	五二
四月	二一	二一	四	五	九	一	〇	一	四	二	七〇	五一	六一
五月	二〇	二〇	六	五	一〇	一	〇	一	一	一	八〇	五八	六九
六月	一八	一八	六	六	一一	五	〇	一	七	〇	八五	七二	七九
平均	二一	二一	五	四	一六	六	〇	一	三	二	六七	五〇	五九

但四捨五入ノ法ヲ以テ算シ一位以下省除ス

名古屋下長者町二丁目自展文會刊行

明治十三年十月十八日出板届

愛知縣藏板

終